
なのはのパーフェクト砲撃教室

蛙捕南三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なのはのパーフエクト砲撃教室

【Nコード】

N1222U

【作者名】

蛙捕南三

【あらすじ】

フェイト「なのはが落ちたあの日以来、私たちはあるひとつのことを誓った……………」

「なのはを守り抜こう」

でも、再び目覚めたなのは……………なんと思いが?になっ
ていた!?」

大妖精「魔理沙さんに勝負を挑んで毎回のようにながけていたチルノちゃん。でも今回は様子が違っていて……………」

この小説には、駄文、キャラ崩壊、不定期更新、独自解釈などの

成分が含まれています。

なのはサイドの人物、用語解説を設置しました。

人物 & a m p ・用語解説（前書き）

友人から、なのはのキャラ紹介載せろと言われたので、載せてみました。

俺はすでに、知っている。という人はいいですが、

なのはについて知らないという人は、是非見てってください。

あ、でも丸のみにはしないでください。ちょっと独自設定、解釈入ってます。

人物 & a m p ・用語解説

高町 なのは

高町家の次女で私立聖祥大附属小学校5年生兼時空監理局本局武装隊所属。11歳。父・土郎、母・桃子、兄・恭也、姉・美由希との5人家族。自称「平凡な小学3年生」。AAAクラスの魔導師。とある偶然から傷を負った異世界の少年ユーノを助け、ロストロギア―（古代遺産）「ジュエルシード」探索に協力すべく魔法少女一（魔導師）となる。そのジュエルシードの探索中、自分と同年代の「寂しげな目」をした女の子・フェイトと出会い、惹かれながらも幾度となく衝突した。戦いを通じて原作第一期終盤ではフェイトと分かり合うことに成功し、互いにかけてがえのない友達になった。

その後もフェイトと離れ離れになりながらも再会を信じて魔法の訓練を続けていた。そんな中、今度は闇の書事件に巻き込まれてしまう。その事件を通して、ヴォルケンリッターの面々や、その主、八神はやてとも友達になる。

明るく優しい性格で強い正義感を持つが、辛いこと、悲しいことを抱え込んでしまう癖があり、一時期はそれが原因で彼女を心配する友人のアリサとケンカ寸前にまでなった。学校の成績は良い方で理数系が得意。ただし文系と体育が苦手。

なのはの住む世界では非常に珍しく、魔導師として「天才」と呼べる素質があり、ユーノを師として実戦を繰り返す中で急速に才能を開花させてゆく。魔力の放出・集束と制御を得意とし、圧縮・縮小は苦手。魔導師になった経緯から、単身でも戦える砲撃魔導師としてのスタイルを確立させた。魔力光は桜色。原作第1期最終話エピソードからは学校で着けるリボンが太めのピンクのリボンから

細い黒のリボンを着けるようになった。

途轍もないほど高い魔力の持ち主であり、原作でもその魔力量に定評がある。

デバイスはレイジングハート・エクセリオン。

フェイト・T・ハラウン

聖祥大付属小学校5年生兼時空管理局本局所属執務官補佐。 1歳。金の髪と「寂しげな目」をしたもう1人の魔法少女。母の使い魔であつたりニスから戦闘訓練を受けていて、なのは同様魔導師としての才能は非凡なものがある。

原作一期では、母プレシアの指示で、ジュエルシードを集めるために使い魔のアルフを伴つてなのは達の住む世界にやってきた。当初はなのはと敵対していたが、彼女の真っ直ぐな優しさや強さに心を開いていく。終盤で自分の誕生の秘密をプレシアから暴露され、さらに自分は「いらない子」だと宣告され心を閉ざしてしまったが、アルフの呼びかけやバルディッシュの支え、そしてなのはの言葉を胸に新たな道を歩む決意をし、なのはのピンチに駆けつけた。「プレシア事件」終結後、「友達になりたい」というなのはの呼びかけにこたえるべくなのはと再会し、お互いの名前を呼び合うことで友達となった。第1期最終話エピソードからは日常で着けるリボンが細い黒のリボンから太めのピンクのリボンを着けるようになった。闇の書事件では、管理局の囑託魔導師として、また、なのはの親友として登場。共に事件を解決へと導く。

高速移動からの斬撃による一撃離脱を得意とし、射撃・広範囲魔法も優れた前衛戦闘型の魔導師。一方でバリア出力の低さなど防御面に難があり、また攻撃に傾倒し過ぎるためトラップに弱い。魔力光は金色。魔力変換資質「電気」を保有しているため、変換プロセスを踏まずに電気を発生できる（つまり、めんどくさい詠唱

を行わなくても電氣を作れる。）。原作二期時ではA A Aクラスの魔導師。一見クールな印象があるが、実際はとても心優しい性格。母・プレシアから虐待同然の酷い仕打ちを受けながらも懸命に尽くそうとするなど、強い意志の持ち主であり、頑固な一面を持つ。

その正体はプレシアが事故で娘のアリシアを失ってから狂ったように研究していた「使い魔を超える人造生命の作成と死者蘇生の研究『プロジェクト F・A・T・E』」の産物として生み出されたアリシアのクローンであり、その肉体に「記憶転写」を施し、当初はアリシアの生前の記憶を持つて目覚めた一（しかし、失敗作と判断したプレシアの手でその部分の記憶は消された）。

狼型の使い魔を使役しており、使い魔のアルフとは「使い魔と主人」の関係を越えた深い絆で結ばれている。

デバイスは、バルディッシュ・アサルト。

八神 はやて

原作二期から登場する主人公の1人。魔導師ランクは、この時点での主要登場人物中最高位のSクラス。小学校は足の障害のため休学中。後に学校へ通えるほどまで回復する。本局捜査官。

最後の夜天の主。9歳の誕生日に現れた、闇の書の守護騎士、ヴォルケンリッターと共に日々を過ごしていたが、自分の命のために行動していた守護騎士の行動から、本格的に事件に関わることになる。その事件の最中になのはやフェイト達と出会い、親友になる。

幼いころに身寄りを無くし、足に原因不明の障害を抱えながらもとある人物の庇護もあつて1人で生活していた。不遇な境遇に置かれながらも前向きで、優しい心を持った強い少女。しかし、なのはやフェイト同様、辛いことや悲しいことを一人で抱え込む癖があり、周りからも心配されている。関西生まれなので柔らかな関西弁で話

す。

デバイスは、なのはの事件の直前に自らのリンカーコアを体内でコピーし、そのコピーされたリンカーコアを本体にして、独立行動、単独魔法使用が可能でユニゾンデバイス・リインフォースIEを生み出し、この他に、非人格型アームドデバイス「騎士杖」シュベルトクロイツ（剣十字）」と魔道書型ストレージデバイス「夜天の書」、さらにリインフォースIEが手にする魔道書型ストレージデバイス「蒼天の書」の4つのデバイス。

シグナム

ヴォルケンリッターの将。「烈火の将 剣の騎士シグナム」。ヴォルケンリッター4人のリーダー格で、実際に「リーダー」と呼ばれている場面もある。現在、首都航空隊に所属。

生真面目で実直、騎士道精神を持つ武人。家族として接するはやてに対しても常に敬語を崩さないが、はやての優しさに安らぎを得ているのは他の騎士と同様。凛々しい風貌の、外見年齢19歳前後の美人で、ピンク色の髪をポニーテールにしている。和食、入浴が好き。

デバイスは、炎の魔剣「レヴァンティン」。

ヴィータ

紅の鉄騎 「鉄槌の騎士ヴィータ」

本局航空隊所属。

騎士たちの中では外見や精神も幼く（外見は8歳くらい）、常に勝気で自由奔放に振舞うが、芯は強く根は優しい少女。外見年齢が近いこともあってか、はやては実の妹のように可愛がっており、彼女もまた「優しいはやて」を強く慕っている。

デバイスはハンマー型のアームデバイス、鉄の伯爵^{くろがね}「グラーファイゼン」（通称アイゼン）。

用語解説

デバイス

要するに魔法の杖。ただ、大抵のステッキと違うところは、杖というより、魔法の特性上、高速演算機としての色合いが強い。なのはの世界においての魔法というのは数学的要素が多い。そのため、数式などを処理したりと、機能的にはパソコンなどに近いものとなっている。

時空管理局

いくつもの世界の平和を守るため活動している組織。
軍隊と警察両方の面を持っている。

聖王教会

大昔に起きた大戦乱を治めた王を崇めているところ。
管理局とは実質独立した機関となっている。

人物 & a m p ・用語解説（後書き）

本編より長い解説。 o r z

ウィキを結構参照にしました。

この小説を読むにあたって、必要最低限の情報しかのせてありませんので、

もっとちゃんとした設定が知りたいという方は、アニメ本編を見るか、ウィキで調べてください。

これからもこの用語なに？とか、誰これ？ということがあれば、要望ください。

東方については、まあ書かなくても良いとは思いますが、そのうち出します。

朝の会（前書き）

どうも、蛙捕南三です。

またしてもg d g d、駄文です。

キャラ崩壊がヤバイです。

レベル的にはルナティックです。

見たくないって人は戻るボタンを二回ほどクリックです。
それではどうぞ。

朝の会

「わたしったらさいきょーなの!」

ブオンブオン

「ちょ、なのは、こんなところでレイジングハートなんか振り回してたら」

ゴン!

「へブッ!」

ドグワッシャー

「ああつ、はやてちゃん!」

「アハハハハ!! ざまーみる!!」

「あーもー!なんでこんなことになってるのよ!」

それは、私たちにとっては衝撃的なものだった。

私たちがそれぞれの仕事に追われていた頃、ある報せが飛び込んできた。

それは、なのはがロストログアの回収任務中に、瀕死の重傷をおい、今も意識不明のままであるといったものだった。

私たちには理解できなかった。無人である世界のロストログアを回収するだけの任務のはずだったのに、なぜ彼女は瀕死の重傷を負うことになってしまったのか。

また、それは監理局全土を震撼させた。今回の事件を知ったほとんどの者は信じられなかった。なぜなら、ヴォルケンリッターの一人、ヴィータと一緒に行動していたからだ。空戦ランク、A A +の相棒がいたのになぜそこまでの重傷を負ってしまったのか。当時の人間はさっぱりわからなかった。

結局、なのはの命は助かった。

それどころか、一時期は歩くことすら困難だろうとまで言われたのはだったが、今では以前と変わらないほどまで回復をしていた。

だが、そこに至るまでが、なにかがおかしかった。
なにかが、というか、全部だったけれども。

それは、唐突だった。

「納得がいかないわ！」

なのはとの面会が許可されてはじめてのお見舞いにいったとき、

なのははいきなりそんなことを言いはじめたのだ。

「さいきょーのわたしがあんな倒され方をするなんてあり得ないの！ きつとこれは罠なの！ わたしを陥れるために誰かが仕組んだ罠なの！ そうだね、フェイトちゃん！ はやてちゃん！」

「あー、えーとっ、」

「それは、その、なんていうんやろな」

私とはやてはいきなりふられて返答に困ってしまい、ついつい詰まってしまった。

しかし、なのははそんなことは気にしていないようだ。

「ヴィータちゃんもシグナムさんもアルフさんもシャマルさんもザフィーラさんもリインもユーノ君も！」

『あ、いや、その、』

同じく話をふられたシグナムたちも返答に窮している。というか、まだ現状が理解しきれていないという方が正しいのか。

「覚えてなさい！ あの蜘蛛みたいなヘンテコ機械！ 今度遭ったら、わたしがさいきょーだってことをしよーめーしてみせるの！ 一人勝手にテンションのボルテージが上がりまくっているなのはを前に、今ここにいるメンバーは全員がおんなじことを思ったであらう。」

（いったい何があった！）

朝の会（後書き）

読んでくださいましたか。強者ですね。

まだ感想もアドバイスもありやしないと思いますが、
あればよろしく願います。

6 / 2 5 修正しました。 M r ・ Xさんありがとうございました。
した。

朝の会 その二（前書き）

実はこの回が、作者の初東方二次創作です。
なんか色々おかしいところがあるかと思いますが、生暖かい目で見
てやってください。
それではどうぞ。

朝の会 その二

ここは、幻想郷にあるとある湖の畔。いつもならば騒がしくも微笑ましい光景が繰り広げられている（氷精が蛙に丸飲みされてたりとか氷精が通りかかった者に片っ端から勝負仕掛けて返り討ちにあったりとか妖精と妖怪がかくれんぼをやったりとか）筈のその場所には、とある違和感が充満していた。

どのような、と聞かれても困るが、いつものそれを知っているものならば、誰しもが違和感を感じるだろう。

「大妖精ちゃん、ちよつといい？」

「な、なあに、チルノちゃん」

今この場所にいるのは声の主二人の他は見当たらない。

二人、というのは語弊があるかもしれない。だが、二体と数えるのにも抵抗感があるので、大体の連中は人と数えている。

片や、大ちゃんと呼ばれた、緑の髪をサイドテールにしている小さな妖精。

片や、チルノと呼ばれた、水色のショートヘアのいろんな意味で小さい（筈の）妖精。

妖精、といっても子供ぐらいの小ささで、某ユニゾンデバイスのように体長が三十センチしかないというわけでもないのだが。

見た目小さくて可愛らしい女の子が二人話しているところと言えば相場は大抵微笑ましい光景なはずだが、現在二人の間に漂っている気まずい雰囲気はそれとは全く異なっていた。
その原因とは！

「ここの割り算の問題なんだけど・・・」

「その問題は、こうしてああして、」

「あ、なるほど！　ありがとう大妖精ちゃん！」

「ど、どういたしまして」

大妖精は困惑していた。

つい最近まで、隣で一緒に勉強をしている彼女は勉強とはほぼ無縁だーという具合の生活をしていたのである。

里にある寺子屋に一応は通ってはいるのだが、宿題などほったらかしで遊び呆けたり、授業中にはところ構わず爆睡をしている彼女が、こうやって自宅で勉強をするなど悪い夢でも見ているのかこんなにやるー。

そしてもうひとつ。本来なら大妖精はチルノからこう呼ばれてい

るのである、大ちゃん、と。
とにかく、大妖精は困惑していた。いや、混乱していた。

（チルノちゃん、やっぱりあのときにどっかぶったのかな？）

彼女の脳裏に浮かんだ原因はたったひとつ。

一週間ほど前のことである。

白のブラウスの上に黒いサロベツスカートを着て、スカート部分に白のエプロンを着けている、童話の中に登場してきそうな魔法使いの格好をした少女、魔理沙は、箒にまたがり湖の向こうにある紅魔館を目指して絶讃爆進中であつた。

彼女の目的地はそこにある図書館。目的はそこにある蔵書を『借りていく』こと。

ひんやりした空気が感じられるようになって、ちょうど湖のそばを通ろうとしたそのとき、

「まちなさい！」

と、小さな人影がその進路の邪魔をした。が、魔理沙はその事前に分かっていたかのようにゆっくりとその速度を落とし、その人影と十メートルほどのところで停止をする。

「ここであつたがひやくねんめよ！ 魔理沙！」

人影の正体は言わずと知れた？、氷精チルノだった。
チルノはいつものように魔理沙に絡む。

「お、チルノじゃないか。 どうしたんだ？」

博麗の巫女辺りならめんどくさそうに対処するのだが、魔理沙と呼ばれた少女は、なんだかんだ言つてその性格からかノリが良い。

「今日こそあたしがさいきょーだつてことを証明して見せるわ！
覚悟しなさい！」

ビシイ！ と魔理沙を指差すチルノ。

「弾幕ごっこか、よし、受けて立つぜ！」

ニヤリと不適な笑みを見せる魔理沙。
決闘が、始まった。

少女決闘中・・・

「恋符『マスタースパーク』!!!!!!」

ピチューン

「チルノちゃん!？」

どうやら先程の様子を遠くから見ていたのだろう大妖精が、目を回しながら湖へ落下していつているチルノをキャッチしようと試みている。

その様子を見て魔理沙は、まあ大丈夫だと推測し再び紅魔館へ歩みを進めるのであった。

「チルノちゃん!」

わたしは急いで彼女の元へ文字通り飛んで行く。いくら妖精とはいえ、結構な高さから落下すれば痛いだけじゃ済まないときがある。それでもなんとかしてダイビングキャッチして彼女を受け止め、ホッと息を吐く。

とりあえず彼女を家のベッドに寝かせようと思い、チルノの家へと向かうことにした。

彼女の家にたどり着き、ベッドに寝かせてしばらくすると、チルノちゃんの意識が戻り、わたしは再度ホッと息を吐いた。

だが、その直後、わたしは恐ろしいことを耳にするのであった。

「にやはは、また負けちゃったなー。これからもつと練習しないと。大妖精ちゃん、応援してくれる？」

「っっ!!」

ゾクゾクツと背中に何かが伝う。何か得体の知れないものを見たときに現れるあれだ。人はそれを、悪寒という。

「あ、大妖精ちゃん、運んできてくれたんだね、ありがとう」

「っっ!!」

あり得ない。いつもの彼女ならば、「さいきょーのあたしが倒されるなんてあり得ないわ!」とかいって自分が負けたことを認めようともしないはずなのに、今日の前にいるチルノちゃんの筈の彼女は、あっさりと自分の敗北を認め、それをふまえての向上心をみせ

ているのである。まさに異変としか言いようがない。

いつの間にかものすごい量の汗が止まらなくなっていた。しかも、

（チルノちゃん、いま、なんていった？）

そう、チルノちゃんの自分に対する呼称に違和感が生じる。

（でも、まだ起きたばかりだし、さっきの戦闘のせいでまだ混乱してるって可能性も・・・）

まずあり得ない可能性だが、今の大妖精にとってはカンドタの糸のように見えてしまっている。大妖精がカンドタを知っているかどうかは別問題だが。

「大妖精ちゃん、さっきから顔色悪いけど大丈夫？　つてもものすごい汗かいてるじゃない！　顔色も真っ青になっちゃってるし！　ねえ、大妖精ちゃん！　大丈夫？！　返事して！」

カンドタの糸はあっさりと切れた。

「大妖精ちゃん！　ちょっと、ふらふらしてるよ？！　本当は大妖精ちゃんが休むべきだったんじゃないの？！」

ボタン！

大妖精は目の前の現実を直視できなくなってしまった。

「大妖精ちゃん！　しっかりしてー！」

大妖精は薄れ行く意識のなかでこう思った。

(チルノちゃん、いったい何があったの?)

朝の会 その二（後書き）

おかしいところだらけだったでしょうが、どうでしたか。
ここは絶対おかしいとか指摘があったらできるだけ優しくお願いします。

感想やアドバイスもよろしくお願いします。

作者は喜んでグングニルとか落とすかもしれないです。
それではまた次の回で。

6 / 2 5 修正しました。

一 時間目（前書き）

どうも、蛙捕南三です。

今回は今までに類を見ないほどぶっこんでます。
それではどうぞ。

一時間目

あの事故から一ヶ月。なのはの傷も殆ど癒えて、院内ならば自由に歩き回れるようになって、私、フェイトも、はやてやヴォルケンリッターの皆も、アースチームのみんなもひとまず安心して、魔法の方もしばらくすれば使用も解禁できるらしい。

でもなんか医者がこんなにも回復が早いなんてあり得ないとかほざいてたけどそんなこと関係ないよね
でも...。

クラナガンはまだ五月に入ったばかりで、暑い日もあれば涼しい日もあり、今日は特に暑くもなく過ごしやすい日だった。

「つまんないの！」

午後の病室で一人口を尖らせて駄々をこねるのは。ちなみに私は病室のドアを少しだけ開けてバレないように見守っている。

傍を通りすぎていく人たちが奇異な目を向けてくるけどそんなことも気にならない。

なぜなら...。

なのははお見舞いの品の中から立方体状の物を取りだし、しばらく

見つめた後、早速その立方体状の物に取り組み始めた。言わずと知れた、ルービックキューブである。

「えい、えい、えい」

なのはは考える素振りも見せずにとんと回している。しばらくすると、むーっと考え込み始め、またしばらくすると、眉間にシワが寄り初めて、そして、

「うがぁー！」

匙を投げた。

なのはに放り投げられたルービックキューブは軽い音を立てて私に隠れているドアのそばに転がってきた。

その一部始終を見て、一言感想を述べたい。

（かわええなあ）

そう、かわいいのだ。微笑ましいのだ。あの可愛らしい姿を脳に焼き付けておくのに夢中で、周りの人なんて眼中に入らない。今の私の目は、はじめてのおつかいの様子を見守っている母親のごとく慈愛のこもった目をしていることだろう。口元はだらしなくにやけながら。

「どうした、テストロッサ。気持ちの悪い顔をして」

と、ちょうど紫のようなピンク色の髪をポニーテールにした女性——シグナムがこちらを怪訝そうな目をしてこちらを見下ろしていた。

「いえ、ただ観察していただけです。なのはを」

キリツと真面目に答える。

「ああ・・・、そうか」

複雑そうな顔をしてシグナムは追求を止める。

「そういえばシグナム、お見舞いに来て大丈夫なんですか？」

「ああ、今日は午前出勤で終わりだな。セキュリティの誤作動があったのだが、そこらはすぐに終わったのでな」

「そうなんだ」

「フェイトちゃん、シグナムさん、来てるの？」

なのはがこちらに気づいたようだ。まあ普通に話してたら誰でも気づくだろう。

スウーっとドアを開け病室の中に入る。なのはの顔はさっきまでの様子とは打って変わって嬉しそうな満開の笑みに彩られていた。

（ああ、かわいいなあ）

なのはのこういった表情は貴重なのだ。今のうちに大腦に焼き付けておこう。シグナムが何やら溜め息をついていたが、何か悩みでもあるんだろうか。今度聞いてみよう。

それから私たち三人はしばらくの間談笑をし続け、気づけばもう夕方だった。

「それじゃあ、そろそろ私は帰るとするか」

といってシグナムはパイプ椅子から腰を上げる。

「じゃあね、シグナムさん！　ありがとう！」

「ありがとう、シグナム」

シグナムはわずかに微笑んで「失礼した」と残して退室していった。

「フェイトちゃんもありがとう」

なのはは少し寂しさを滲ませながらもそれを隠すように明るく笑う。

「いって、なのはは、私の友達なんだから」

と言いながら私はなのはのベッドのテーブル部分に置いてあったジュースの缶を片付けようと手に取る。意外にもまだ冷たくて声をあげそうになったが堪える。

「いって、わたしがやっつく！」

そう言っで自分でやろうとするなのは。

「なのははまだ病み上がりなんだし、大人しくしてて」

「わたしはへーきだから、こんなのどーってこと」

「なのは」

私は少し声を低く抑えてなのはの言葉に割り込む。
すると彼女はビクツとなって黙り込んでしまった。

「なのはの体はなのはだけのものじゃないんだよ、なのはが無理をしたらみんなが心配する。わかってくれるよね」

「うう．．．わかった」

親が子を諭すようになのはに言いつけると、彼女は渋々という様子だったに従った。

「じゃあ、私もそろそろ帰るね」

「ありがとう、フェイトちゃん」

なのは最後まで強がっているように笑っていて、それが私の心残りとなった。

二人分の缶を手に病室から出ると、むわっとした熱気が覆い被さってくる。

（あれ、病室のクーラーって入ってたっけ）

少なくとも私たちが入ったときには涼しかったのだから、その前からクーラーが入ってたとしたらおかしくはないが、今日の気候からするとクーラーを入れるほどでもなかった筈だ。

（まあ、なのはは暑がりだから）

そう自己完結をして、病室から去ることに決めたのだった。

なのはの寂しそうな顔が、夜誰かに見られているようで怖い、と言っている子供の顔にも見えたのだが、それはまあ余談だろう。

シグナムは海鳴市の路地裏で一人立ち止まっていた。

“にゃーん”

いや、一人というわけではない。一人と一匹だ。

クラナガンの地上本部にある転送ポートへ向かっていたところ、ある一つの気配を感じ、路地裏に入ってきたのだが、そこにあったのは段ボール箱が一つだった。

“にゃーん”

聞き間違いではない。段ボール箱の中を覗いてみると、そこにはやはり、一匹の子猫が捨ててあった。

（やれやれ、酷いことをするものだ）

シグナムは箱から猫を両手で抱えるように出し、抱っこしたような状態になる。

その猫の黒色の毛並みはまだ綺麗で、捨てられたのはつい最近でないと物語っていた。

（このまま連れていくのは無理だろうな）

子猫を箱の中に戻し、立ち上がったその目の前に、

たくさんの目玉が、空間を裂いてソコに在った。

一時間目（後書き）

ユ「……………」

蛙「どうした淫獣」

ユ「淫獣言っな！ それより！」

蛙「なんだ、マスコットキャラクター（笑）」

ユ「笑うな！ いい加減にしろ！」

蛙「すまん」

ユ「あんた、僕の扱いひどくないか？！ 僕の登場回数一回だぞ！

しかもほとんど出てないのと一緒にいたいな出し方で！」

蛙「大丈夫だ、ストックとプロットを見てみるから……………」

ごめん」

ユ「チクショー……………」

てなわけで、本編三話です。

ユノ君は残念ながら出番がありませんので、あとがきのみの登場とさせていただきます。後悔も反省もしておりません。

作者はそろそろ感想が欲しいなあーって思い始めてます。

感想やアドバイス、その他がありましたらよろしくお願い致します。では。

6 / 25 修正しました。

二時間目（前書き）

PV4500ユニーク1000突破しちゃったよ。 。 D（

マジかよ感想来たよ（；。 D（

こんな駄文を読んでもくれる人がこんなにもいるとは。

感想、ホントに、ありがとございます。

また、このssを読んでもくださっている皆様に、深く感謝いたします。

二時間目

早朝六時。

管理世界の中で一番の広さと医療技術を誇る、クラナガン第一病院の一室。

そこには、ベッドから上半身だけ起こして窓の外を眺めている少女がいた。

なのはは暇だ。

とてつもなく暇なのだ。

彼女は、病院の起床時間の七時より一時間も早く起きてしまったため、することもない状態のままベッドに縛られている状態である。もし勝手に廊下に出してしまうと必ずナースのおねいさんに取り押さえられて、ベッドまで強制連行されてしまう。今までに九回ほど経験をしていて、そろそろ学習して欲しいと言うのが、看護師や近隣の病室の病人たちの本音だ。

だが、その姿すら可愛いと思えてくるのは何かしらの病気だろう。

「暇だわ」

なのははどうやって暇を潰そうかを考える。

とりあえず考えるために病室を見回す。

とりあえず身を起こしてみた。そうでなければ始まらない。

窓を開け閉めしてみる。がらがらなるだけでさして暇潰しにもならない。次。

ベッドにつけるテーブルを出しては収納してみる。ぎーぎーいってうるさいだけだ。次。

と、ちょうどベッドのとなりにある棚のフルーツバスケットに目がいった。色とりどりの果物がそれぞれの色合いを放ちつつも全体的には調和を保っている。

（じゅるり）

とても、美味しそうだ。と、なのははヨダレが出てくるのがわかる。元来なのはは甘いものが好きで、喫茶店である実家の手伝いも喜んでやっている。

（これはわたしのための物だから、別に食べてもいいんだよね）

と自己正当化をしてバスケットに手を伸ばそうとする。

まずはどれを食べようか。リンゴか、バナナか、ブドウか。どれにしようか迷っていると、彼女はあるものを見つけてしまった。

なのははそれを手に取ってみる。

赤くて少しだけ太い紐がリング状になっているもの、そう、あやとりだ。

（そういえば昔お兄ちゃんにやってもらってたっけ？）

そうしばらく紐を眺めていると、なんだかやりたくなってきているなのは。

（よし）

何度でも言おう。なのはは暇なのだ。

暇潰しになるものを探していたのだ。

一旦ハマりだすとそうは抜け出せないのが人間である。

途中からなのはの様子を覗い、もとい観察していたギャラリーか

らは安堵の息が漏れる。今日は静かになりそうだと。

「えい、えい、えい」

一生懸命紐の間に指を通していくのは。

かわええなあ、という声がギャラリーの奥から聞こえてきたが、気づかれちまうだろうが！ と封殺されてすぐに静かになる。

「むー」

一方のなのは、やり方が思った以上にうる覚えで、悪戦苦闘していた。しかも自分が何を作ろうとしていたのかすら思い出せない。

（えーと、これがこうで、ここが、あれ？）

やはりというかよくわからなくなってしまい、首をかしげるのは。

作るものをイメージしてもう一度、と再チャレンジを始める。

（．．．．．）

なのはが黙り込んでしまうと、ギャラリーに緊張感のようなものが漂う。

息を止めるものもいるほどだ。

（このパターンは．．．．．）

ふと、ギャラリーの間にとあるムービーが浮かんでくる。

六、五、四、とカウントダウンを始める輩もいる。

そして、

「うがぁー!!」

なのはは爆発した。

あやとりを何処かへと放り投げてばふんっ、とベッドに起こしていた上半身を投げ出す。

彼女は細かいことが以前に比べて苦手になっていたのだから、当たり前といえば当たり前なのだが。

（やっぱりこうなったか）

もちろんギャラリー（変態という名の紳士）は予測済だった。予測済だったのにも関わらず、

（でもかわええええええええええっ！）

思わず叫びそうになってしまう。

それだけの破壊力を、なのはは無意識の内に放っているのだ。まさに魔王（可愛）だ。

「うー」

なのははつまらなさそうに唇を尖らせる。

他にはなにかないのかなーと呟きながら窓の外に視線をやった。

（やべえ、こいつ、マジ萌ええ）

ギャラリー（ロリコン）もまた気持ちの悪い顔をしてなのはの姿を覗く。その数、二十余人。

ちゃん←ちゃん→ちゃん←ちゃん→ちゃん→ちゃん←ちゃん←ちゃん→
やん→♪

起床時間のオルゴールが鳴る。

それを聞くなりなのは顔が満開の笑みに移り変わった。

(リーダー！)

(今日はここまでのようだ、撤収するぞ)

(おう！)

(ではまた明日)

(yes, sir！)

これらの会話を一瞬のアイコンタクトで済ませた変態たちはわずか三秒の内にそれぞれの病室まで戻っていた。ちなみに何人かは階すら違うのだが。

しばらくすると、なのはの病室に一人のナースが朝食を運びに入ってきた。

「あ、アフラノールさんだ！」

「はいなのはちゃん、朝食の時間ですよー、あ、わたしを食べるなら夜にしてくださいね」

アフラノール・ボンス、二十四歳、独身である。病院内で結成されたなのはのファンクラブの副会長を勤めている。それと、当たり前のごとく、彼氏募集中である。

「？ どうしたの、アフラノールさん」

勝手に身をくねらせ始めるアフラノール。

なのははただ純粹に何をしているか聞いただけのはずだった。が、

「ああ、そんな冷たい目で、蔑んだ目でわたしを見ないで！　いいえ、もつと見て、罵倒してちょうだぶっ！」

「てめえはいっぺん墓場逝きやがれ」

なのはが軽くドン引きするほどの暴走ぶりだったナースは、後ろから現れた超真面目な苦勞人、ゴードン医師によって撃墜された。

ゴードンは、すまん、と言ってなのはに朝食を配ると、ズルズルと変態ナースを連れて病室を後にした。

一人残されたなのはは、

「わたしを差し置いて盛り上がるなんて」

場違いな突っ込みをしていた。

大体毎日こんな感じなのは、言うまでもあるまい。

二時間目（後書き）

ユ「酷い内容だな」

アルフ（以下ア）「まったくだよ」

ユ「読者離れてくぞこんなんじゃない」

ア「ほんとだよ、ちょっとは自重したらどうなんだろうねえ」

ユ「ところでアルフ」

ア「なんだいユーノ」

ユ「なんでアルフがここに？」

ア「決まってるだろ、あんたに会うためさ」

ユ「ア、アルフ！」

どうも、蛙捕南三でした。

感想とかが嬉しくてついやっちゃいました。

後悔はしてませんが反省はしています。

ほんとに読者減っちゃうんじゃないかと思ってビクビクしてます。

感想、アドバイス等あったらください。よろしくお願いします。

あと、この前活動報告とかを活用してる人を見て、やっぱりマイページを活用した方がいいのかな、と思って、活動報告を始めました。（だからなんだって言う話ですが）

感想やなんかも、あまり堅くない方が好きです。（感想が来るかもわからないって言う話ですが）

では、次回をお楽しみに！

三時間目（前書き）

どうも、蛙捕南三です。

まず最初に、PV6800 ユニーク1500突破しました。
読者の皆様、ありがとうございます。

さて、・・・・・・・・やべえ、aggaggすぎるなこれは。
やっぱり説明が苦手すぎる・・・・・・・・。。
ではどうぞ。

三時間目

大妖精が現実逃避をしてから数日。博麗神社の縁側に、二人は座って茶を堪能していた。

片や腋の大きく開いた紅白の巫女服を着た少女。

片やナイトキャップのような帽子、ZUN帽を被り、少し古めかしいドレスのような洋服を着た女性。

「紫」

「なに、霊夢」

霊夢と呼ばれた少女は、少々不機嫌そうな様子で女性に話しかける。

霊夢の不機嫌な顔に対し、紫の顔はどこ吹く風といった様子である。

「あんた、働かなくていいの？」

「もう終わったわ」

「嘘ね、あんたんとこの式が働いてたって聞いたわよ」

「誰から聞いたのかしら？」

「鬼からよ」

紫は余裕の表情を崩さず、さらに胡散臭い笑みを浮かべる。

ズスツ・・・緑茶をすすって息を吐く紫。

「結界の修繕なら藍にやらせたけど、私はそれ以外に仕事があったのよ。かなり久しぶりに徹夜したわ」

よくよく見てみると紫の目元につつすらと隈が確認できた。

「珍しい、というか信じられないわね、あんたが夜更かしなんて」
「傷つくわあ」

紫は傷ついたように顔を手で覆うが、傍目から見て一瞬で演技とわかる。

「それだけのことをする必要があったのよ。結界のいじくられ方が結構変わってて、いじられた痕跡をたどっていく作業が難航してたのよ」

「で、なにかわかったの？」

「なにも」

「.....」

「.....」

「.....」

「すいませんでしたこの通りからその御札をすぐにしまってくださいますようお願いします」

「もう一度聞いわ、なにかわかったの？」

霊夢が無表情でもう一度質問すると紫は少し神妙な顔になって漸く答え始める。そこには先程のような胡散臭さが見当たらない。

「私の予想した通り、外の世界からの介入だったわ。行ったのは恐らく能持ちの妖怪。それも、かなり特殊な、ね」

「いまだに現代で影響力のある妖怪なんて珍しいわね」

「これに関しては推測だけど、妖怪としてではなく、なにか別の顔が有名になっている可能性もあるわ」

「ふーん、で、チルノのことも絡んでるの？」

「ええ、更に、あの氷精の身に起きたことは今回の件についてとても重要なことよ。結界を破った術式の媒体としてチルノが使用され

たことが確認できたわ。恐らく、何者かの能力によって、外の世界にいるもう一つの媒体を使用して幻想郷と外の世界を繋げたんだと思うわ」

そこまで解説したところで、緑茶を一口すすする。ここで、霊夢がある疑問を口にする。

「それでも、あの？の性格が変になったのとは関係が」
「そこが問題なの」

だが、霊夢の台詞を遮って紫は言う。

「どんな能力を使えばあんな現象が起きるのか今のところでは判断材料が不足しているの。もう少ししたら、外の世界に行ってもう一步踏み込んで調べてこようと思っているのわ」

外の、と聞くと霊夢は諦めた様子で、

「私は外の問題に対してはさっぱりだから、あんたに任せるしかないんだけど」

こうぼやいた。

「大丈夫よ、八雲家総出だから」
「なに？　そこまで敵って強そうなの？」

幻想郷の管理者や、妖怪の大賢者とも呼ばれる者のみならず、その式、九尾の妖弧と、その式まで解決に乗り出すというのはよほどのことがない限りほとんど無い。霊夢が驚くのも無理はない。

「強そう、じゃなくて厄介そうなだけだね」

でも、と紫は続ける。

「この私の愛する幻想郷に刃を向けるということがどういうことか、きっちり体に叩き込んであげないといけないもの、フフフ」

不気味に笑う紫にちよつと引き気味の霊夢。

霊夢は静かに、今回の異変の犯人に冥福を祈るのであった。

二人が話している縁側に近い茂みの中、それを盗聴、いや拝聴していたもうひとつの二人組がいた。

「あやや、大変なことになってるようですね」
「みたいだな」

物語は、動き出している。

「ところで、次の取材はどこに？」

「そうですね、次は向こうにいつてみましょうか。スクープの匂いがします」

「行き当たりばったりだな……………」

……………動き、出している、のかもしれない。

三時間目（後書き）

藍「……………なぜこのコーナーを押し付けられた」

藍「結界の修繕もほとんど私がやっているというのに」

藍「……………しょうがない。やる以上はきちんとやっておこう」

藍「うふ♪ 私は八雲藍、ぴっちぴちの十六歳よ♪」

橙「……………らんしゃま」

藍「ちえ、橙！？ いつからそこに？」

橙「『押し付けられた』くらいからです」

藍「最初から!？」

橙「でも、さっきのらんしゃま、とっても可愛かったです（モジモジ）」

藍「ちええええええええええええええええん!!」

あはは、やっぱり説明駄目だ。

もっと文才がほしい！（レイク的な感じで）

そしてもっと他の作者さんとコミュニケーションがとりたい！

というわけで、感想やアドバイス等ありましたら、是非是非よろしくお願いします。くださいね？本当に。

四時間目（前書き）

どうも、蛙捕南三です。

基本この小説は土日更新はしません。

人気のないこの小説は一気に下の方に流されてしまいますから・・・。

・・・今回も調子によってgggdになりました。
ではどござ。

四時間目

ここは、昼下がりの霧の湖。

この場にいるのは二人だけである。

「大妖精ちゃん、いっくよー！」

全体的に水色なイメージの見た目をした少女、しかし、彼女には普通の人間にはあり得ない器官である、羽を背中より六つ生やしている。

「大丈夫だよーチルノちゃん！」

緑の髪をサイドテールにした彼女にもまた、羽が生えている。

そう、彼女らは人ではなく、妖精なのだ。

あの事件があつてしばらくたって、大妖精も、また、彼女らと仲のいいルーミアやリグル、ミスティアらも、チルノの変わり様にも大分慣れてきていた。

なぜか、みんなで勉強やろー、と言い出したときにはさすがに皆ヒヤリとしたが、それ以外はほとんど違和感なく生活を送っていた。

「いくよ、私の新スペル！」

今彼女らはどうと、チルノの特訓の最中で、今日はそのお披露目といったところである。

大妖精がそのスペルを体験してみて、いいか悪いか判断をするだけという簡単な特訓なのだが、他人から見た自分の姿というのは案外勉強になるものなのだ。

「まずはこれから、……………氷塊『アクセラクラッシャー』！」

スペルカードの発動と同時にチルノのまわりに握り拳一個ほどの無数の氷の塊が発生する。一秒一秒重なるほどに数十個単位で増えていく氷塊。

ある程度生成されると、何十個もの氷がまとめて発射される。

速度としては普通で、密度といえどどちらかというと薄い方だ。

大妖精が難なく隙間を縫ってやり過ごそうとしたとき、彼女の目の前に突如として氷塊が出現した。

「っ！」

驚いた彼女はすぐさま転進しなんとかかわすことに成功する。

すぐさま第二波が発射され、また同じくかわそうとするも、今度は二つ、氷塊が目の前に迫ってきており、さすがに避けきれず一発喰らってしまう。

「くっ！」

「まだまだ！ 氷毬『アイシクルバインド』！」

今度は氷でできたリング状の弾幕が高速で接近してくる。

前後左右そして上下に忙しく動き、なんとかリングの猛攻を凌ぎきることが出来たか、と一瞬気が緩んだ瞬間、なんとリングは大きく旋回をしてまたもや大妖精に向かって突撃をしてきたのだ。

これにはさすがに対応ができず、リングが左の足首に当たり、さらにそのリングは足を固定するかのように足首にはめられた、いや、リング状に氷が固まった、といった方が正確だろう。

事実足が固定され大妖精は空中で身動きがとれなくなった。

ふと弾幕が止み、はっとチルノの方を向くと、彼女は今まさに巨

大な氷塊を生成し終わったところだった。

「いくよ、氷符『ディバインフォール』！」

そしてチルノはその塊を前方に、大妖精の方に発射した。
迫り来る巨大の氷。

「！！！」

着弾する前にどうにか逃げようとするも、足首が固定されていて
その場を動くことができない。

そのまま、ディバインフォールは大妖精に直撃した。

「大丈夫？ 大妖精ちゃん」

大妖精が目を覚ましたときにまず目に入ったのは、心配そうな顔
をして大妖精の顔を覗き込むチルノであった。

あの後大妖精は即気絶してしまい、湖にまっ逆さまに落ちていき
そうで、慌ててチルノが救助に向かったのだった。

「大丈夫だよ、チルノちゃん」

とりあえずチルノを安心させるために微笑みながら身を起こすと
チルノは心底安心したかのように息を漏らす。

「それにしてもすごかったね、さっきの」

大妖精は素直な感想を口にする。

「あ、うん、あれね、私に足りないのって何かなって考えてみて、それで思ったの。『相手に確実に大きな当りを加えること』だって」

大妖精は絶句した。

「それでね、ああやって固定すれば絶対当たるから、それを狙おう
と思って」

まあ強い人には効かないんだけどね、とチルノは付け加えた。

しかしながらこの進歩は驚くべきものだ。毎回同じパターンで敗
けを喫しながらもそこを直そうともしない彼女が、自分の戦い方を
振り返りさらには新しい戦法を編み出したのだ。

彼女が変わったその時と同じくらいの衝撃が大妖精を襲う。

と、そこに一陣の風が舞い降りる。

「お取り込み中失礼します。清く正しくがモットーの、射命丸です」

風ではなく天狗だった。

黒髪ショートに赤い瞳、赤い山伏風の帽子を被り、赤い天狗下駄
を履き、フリル付きの黒スカートと白の半袖シャツ、といった姿の
鴉天狗、射命丸文が突如出現した。

「ど、どうも……………」

「あ、はい……………」

いきなりの事で二人はうまく反応ができない。詰まったような返事しかできなかった。

「以前にも取材させてもらったばかりなのですが、今回はあれからのことをお聞きしたいと思ひまして」

文が手帖を開きながら喋る。

その様子を見てチルノは、

「あ、じゃあ私はちよつと向こういつてくるねー」

とその場を離れていった。

これも、以前の彼女ならあり得ないことだ。

「さてと、では取材を始めさせていただきます」

「は、はい、よろしくおねがいします」

質問の内容はさほど難しくはなかった。

ここ最近の彼女の様子や彼女の周りの反応やら大妖精自身どう思

っているかなど、それだけのことだった。

大妖精としてはもう一人射命丸と一緒にいた見知らぬ女の人のことが気になって聞いてみたが、

「新しい私の助手ですよ」

とだけいつて詳しくは話さなかった。

ありがとうございましたー、と射命丸が風を置き土産に飛び去っていった。大妖精は風に飛ばされそうになるもその場に踏ん張って堪える。

「大妖精ちゃん」

チルノが射命丸が飛び去ったのを見て大妖精の元に帰ってきた。

訊けば湖の周りの妖精の数をずっと数えていたらしい。

かわいいなあなんて思いつつ大妖精はチルノとの特訓を再開する。既に彼女の頭から見知らぬ女の人のことなどとうに忘れ去られていた。

四時間目（後書き）

藍「作者からの伝言だ」

霊夢（以下霊）「なんかあったの？」

藍「作者は最近学業で忙しくて更新が遅めになりそうらしい」

霊「自業自得ね」

藍「バカじゃないのかあの堕作者は」

藍「しかもなんだあの短いバトル描写は」

藍「さらに最後なんて力尽きてるんじゃないか」

霊「そろそろ作者泣きそうよ」

藍「ではまた今度にしよう」

霊「（作者、耐えきれるかな）」

．．．．．はい、どうだったでしょうか。

．．．．．藍がいつてましたが、更新がちょっと遅れ気味になりそうです。

ですが、今後もこのパーフェクト砲撃教室をよろしくお願いします。

あ、感想やアドバイス等ありましたらください。

感想やアドバイス等ありましたらください。

大事なことで、二回言いました。

それでは。

せんでした。ご指摘、ありがとうございます。

五時間目（前書き）

どうも、蛙捕南三です。
最後の最後で力尽きました。
ではどうぞ。

五時間目

次元世界の秩序と平和を守る組織、時空管理局の本局に、フェイトはいた。

「ふう……………」

フェイトは多くの管理局の艦船が停泊する次元港のロビーで、自身が乗船する船の準備を待っていた。

pipipi……………」

と、コーヒーの入った紙コップを片手に一息ついていたフェイトのデバイス、バルディッシュに秘匿回線を通じて誰かから通信があった。

「えっ……………」

フェイトはそれが誰なのかを確認するなり、人のあんまりいない通路に場所を移し回線を開いた。

相手は、クロノだった。

クロノは、フェイトの五歳上の義兄で、現在提督に成り立てのエリートである。

「ちょっといいか、フェイト」

「なに、クロノ」

フェイトは声を潜めて応答する。

秘匿回線というのは、よほどのことがない限り使われないものなのだ。

通常、局員同士の通信というのは局が管轄する連絡基地を通じて行うことが殆どで、その通信にはログが残る。つまりは、閲覧可能なのだ。しかし閲覧できるのは執務官や提督など、限られた人間だけだ。無論、正式な手続きは必要だが。

それに対し秘匿回線は、デバイスとデバイス、もしくはそれ以外の通信端末同士などを、直接リンクさせて行うもので、その端末に対し高度なハッキング技術を使用しなければ傍受できないのである。今回クロノは秘匿回線を使用している。とすると、限られた人間——上層部に知られたくないことを話そうとしているとしか思えない。ましてや彼は無駄なことは省きたい性分で、尚更だ。

「今回の事件の原因の機械兵器についてなんだが」

機械兵器、という単語にフェイトは反応する。

「なにかわかったの？ クロノ」

つつい声のボリュームが大きくなってしまったが、しかし周りを見ても皆各々のことをしていて気づいた様子がない。それを確認できたところでほっと息が漏れる。

「ああ、マリエル技師による解剖の結果、こんなものが出てきた」

といってクロノは懷から一枚の鉄でできたカードのようなものを

取り出した。 なにか文字が彫られているようだが、こちらからは確認ができない。

「なんとこれにはJ・S・と彫られているんだ」

「J・S・って、まさかジェイル……」

「そうだ、ジェイル・スカリエツィだ」

クロノと一緒に執務官について勉強している時に出てきた次元犯罪者の名前だ、とフェイトは記憶から引っ張り出してきた。聞くところによると、彼はここ五十年程年をとっていないとか不思議な力を持っているとか噂されている、並大抵ではないとされる次元犯罪者だ。

だがフェイトには個人的に彼とは接点というものがある。彼女が生まれるきっかけとなった技術、プロジェクトFの基礎理論を彼が構築したというものだ。

少なからず彼女にとってこの事実は衝撃的なものだった。と、ここで回想を終える。

この後にフェイトはジェイルという存在を局員として、また、プロジェクトFの遺産として、時には私情も挟んで追いつけることになるのは、また別の話。

「ここから秘匿回線を使って伝えたかった話だ」

クロノは少し間をおいて次の言葉を発する。その間、フェイトは息を飲んで見守った。

「……どうやらこの事件、上の方も関わっている可能性が出てきた」

「上の方、って」

その先の言葉が信じられないかのようにフェイトは目を見開く。
なぜならそれが真実なら、自分達が所属している組織の根本を覆すような事だからだ。

クロノはフェイトの予想通りの答えを口にする。

「最高評議会だ」

「……………っ！」

フェイトは絶句した。クロノの表情もまた、いつもの無愛想な顔に見えるが、彼に近いものならば、彼も信じられないと思っているのも見抜くことができるだろう。

クロノはフェイトの様子も見ながら話を続ける。

「……………なのは事故の直前、評議会の方で少し動きがあったんだ」

「一体何のために」

「わからない、なのはがいた世界に見られてはいけないものでもあったのかもしれない。しかも、クラナガン第一病院に収容される間にほんの少しタイムラグがあったのも気になる」

「……………」

「だが、相手の思惑がわからない今気にしててもしょうがない。何かが起こったときに何とかすればいいさ」

「それじゃあ意味がないよ、クロノ」

暗くなりかけていたフェイトの思考をクロノは軽い冗談で和ませる。クロノにはこういう気遣いができるところは立派な兄らしさが滲み出ている。

「それだけだ、切るぞ」

「うん、ありがとう、お兄ちゃん」
「な、お、おにい」

クロノが何かをいいかけていたところを遮って通信を切断する。
クロノに冗談を返せるぐらいには回復したフェイトは、そろそろ
出港の準備ができた頃合いかな、と船へと向かっていく。

（そういえばなのはって今日から魔法のリハビリ始めてるんだっけ）

大丈夫かなあ、と思いを巡らせるフェイト。

（でもヴィータがついてるし）

そう自己完結をして、何事もなかったように手に持っていた紙コ
ップをゴミ箱に捨てた。

ちなみに、顔を真っ赤にして慌てふためく提督が一名ほど発見され
たのは、ほぼ同時刻だった。

日差しも暖かく高くもない温度と湿度、過ごしやすいその日、病

院の中庭、その中でもあまり人気のない場所に、なのはとヴィータはいた。

「アクセルシューター！」

瞑想しているように目を閉じたなのはがそういつと、彼女の目の前に桜色の球体が膨脹するように発生する。術者自らの意思で操作、誘導が可能な精密誘導弾、アクセルシューターだ。

なのはの戦術において重要なフアクター、キーアイテムまたはキーマジックだ。

ターゲットはなのはの手に握られているオレンジジュースの缶。それを空高く放り投げ、リハビリは始まる。

《1、2、3……》

カンッ、カンッ、とシューターが規則正しく缶に当たる度缶は左右にずれることなく打ち上げられ続けている。

《1、2、1、3、1、4……》

ヴィータはその様子をすぐ近くのベンチに座って見守っていた。その雰囲気は心なしに暗い。

（あるとき、あたしがもっとしっかりしていれば）

事故があつたときの後悔の念が、今もヴィータにのし掛かる。

（あたしが一番傍にいて、あいつに何かある前に何とかするのがあたしの役目だったのに……）

《2 1 ' 2 2 ' 2 3》

彼女の拳に爪が食い込むのではないかというほど力が入る。

（次こそはぜってー守ってやるからな、なのは）

そして彼女は何度目かの決意をする。

《3 1 ' 3 2 ' 3 3 ' 3 4》

（だから）

「ああもう！　ちまちまめんどくさいの！　デイベイン、バすうっ！」

「こんなところで砲撃魔法なんか使うな！」

なのはがいきなり大威力魔法をぶっ放そうとしたので、ヴィータは自身のデバイス、アイゼンでなのはの頭をぶん殴って止める。かなり鈍い音がしたのだが、なのはは何故かけろっとしている。

「細かい作業は嫌いな の！　だから一気にデイベインバスターで止めを」

「刺すな！　実戦でもねえしまだリハビリなんだよ！　なにいきなり負担の大きい魔法使おうとしてるんだこのタコ！」

《待ってください！　マスターはなにも間違っていない！》

「ちょ、レイジングハート！？」

《見てください！　細かいことが苦手でつい自棄になってしまうこの愛くるしい姿を！　もう何かの壁を越えてしまいそうなんです！》
「ダメだこいつら、早く何とかしないと特にレイハ」

《Why!？》

ここを病院だとすっかり忘れて騒いでいるヴィータとなのはブラ
スレイジングハート。その姿を遠目で観察している二対の目。

片や紫に近いピンク色の髪をポニーテールにした女性。

片や黒色の綺麗な毛並みをした猫。

「何をやっているんだあれは……………」
“にゃーん”

とりあえずは注意をしておこうと思っている彼女だったが、なか
なかタイミングがつかめない。

「……………さてどうしたものかな」

無情にも、その呟きは傍らの猫以外に届くことはなかった。

五時間目（後書き）

ユーノ「……………作者からの伝言だ」

ユーノ「『ネタがない！』」

ユーノ「死ねばいいと思うんだ」

ユーノ「第一部のプロットはできてるらしんだが、書けないらしいんだ」

ユーノ「文才のなくそ作者に使われるキャラが可哀想だ」

……………なんかユーノにぼろくそ言われましたが、どうだったでしょうか。

……………ええ、ほんとに書けないんです。スランプですかね？でも頑張り続けます。砲撃教室を続けさせるために。

応援、よろしく願います！

活動報告もチマチマ更新してます。

次話の更新報告を、Twitterでもやってるので、そっちもよろしく願います。

最後に、感想アドバイス等、お待ちしてます。お待ちしてます。

六時間目（前書き）

遅れてごめんなさい

六時間目

ここは、数ある次元世界の中にある部屋の一室。
明かりといえばモニターとポットから発せられる光以外にはほとんどない。

かなりの広さを誇るこの部屋の中央に、生体ポットが三つ。その中には脳髓が丸ごと浮かんでいる。それらに囲まれた見た目二十代後半ぐらいの男。紫紺の髪に黄金色の瞳。そして白衣を羽織ったその姿はモニターのぼんやりとしたライトに照らされて、その存在を強調している。

彼の名前は、ジェイル・スカリエッティ。

「それで、あの件はうまくいったのか」

ジェイルからして右斜め後ろのポットから音声が響く。

「ええ勿論です。評議会の皆さんのご協力もあり、研究もはかどっています」

自信満々というより、含みのある顔で答えるジェイル。

「お前から頼み事をされたときは何事かと思えば、お前の研究が進むのならば私たちはできる限りの協力はするつもりだ」

今度は左斜めのポットから。

「ありがとうございます」

ビジネススマイルでジェイルは礼を言った。

「報告は以上だな」

そして正面のポット。

「ええ、それでは失礼します」

それを区切りに、彼のホログラムはプツツと姿を消した。

しばらくの沈黙の後会話が再開される。

「そついえば、あやつ作品、ナンバーズとやらは今何機稼働中だ」
「五機じゃなかったか」

「確かそうだ。近いうちにもう二機が稼働を開始すると言っていたが」

「．．．．．ところで、二人は誰が好みか？」

「愚問だな．．．．．トーレだ」

「いや、ウーノだろう」

「私的にはチンクが一番．．．．．」

『なんだと！』

「Why!？」

「このロリコンがあ！書記の癖に！」

「社会のゴミがあ！書記の癖に！」

「いや書記の癖について意味わかんねーだろ！」

『うるせえ！』

「おお、ナイスシンクロ」

「ああ、無愛想の中に垣間見える優しさが．．．．．トーレ最高！」

「主人のためしつかりと家庭を支える良妻賢母なウーノが一番だ！」

「議長が人妻属性好きとか．．．．．むしろお前らの方がごみだな」

ひどい会話の横でメンテナンス係の女性は内心複雑な顔をしていた。実は彼女、スカリエッティが生み出した第二の戦闘機人、ドゥーエなのだ。

彼女の家族である姉妹達の話題の中、いないかのように扱われているのは悲しいものだ。

（．．．．．私はどうなのかしら）

悔しさのあまり表情が崩れそうになるのを自信の能力、『偽りの仮面』で抑える。というか、半泣きだった。

（今度クアットロと吞もう．．．．．）

「次はかくれんぼしよう!」

『いいよ』

すこしばかり涼しい風が体を撫でるような天気、病院の中庭にはなのはと、なのはと同年代ぐらいの男女が仲良く遊んでいた。訊けばみんな事故や事件に巻き込まれて重症を負ってしまった子供たちだという。最近ようやく動き回れるまでに回復をした子供たちらしい。

その様子を、私とはやて、シグナムはなのはの病室から眺めていた。

「なのはちゃんもよかったなあ、あんなに元気になって」

「本当にそうだね、ていうかはやて年寄り臭いよ」

「ババアいうな!」

「そ、そこまでは言っていないよ」

「主はやて、落ち着いてください」

憤ってたはやての服の襟をシグナムがグイッと引っ張った。「グエツ!」っていったけど大丈夫かな。

「ゴホン、でもな、フェイト、ちゃんにもちよつとは気にして欲しいんよ」

「テストロツサ、せめてBBAにとどめておけ」

「ちよつ!...シグナム!」

「いや、さっきの私よりもっとストレートな気がするよ」

「気のせいだ、そうですよね、主BBA」

「ウガァー!」

「落ち着いてはやて!」

シグナムに飛びかかろうとするはやてを止めようと襟に手をかけ

引っ張る。

「ウゲエ！」

あ、もしかしたらさっきのシグナムの時よりもっとキツくやつちやったかもしれない。

さすがにはやても落ち着いた、というか諦めたのか、思いつきりため息をついた。

「それで、さっきの話、もう少し詳しく教えて欲しいんだけど」

「うん、ジェイル・スカリエッティについて、だったよね」

私は、はやてに今回の事件の犯人だろう人物について話すことに決めた。多分、これから長い間追うことになるだろうし、その過程で捜査官であるはやての助力も乞うことになるそうだからだ。

「広域次元犯罪者、ジェイル・スカリエッティ、生年月日や出身地は不明。機械兵器の開発、密造、生命操作など違法技術の研究、密売など．．．．．一つのリストに上がってるだけで140件」

「．．．．．よくもまあここまでやれたなあ」

「それに、プロジェクトFの基礎理論を構築したのも．．．．．」

「あ．．．．．それって」

はやてが考え込みそうだったので慌てて次を話す。

「ま、まあスカリエッティの名前が上がってからすでに50年は経過してるからね」

「なんや、．．．．．爺さんか」

「それが変な噂が立ってて、なんと50年間年をとってないとかそれを聞くなりはやてとシグナムの眉間にシワが寄る。

「あと、なんか妙な能力をもってるとか」

あ、またシワが深くなった。と、はやてが知ったらキレること間違いないの思考を私はする。

「．．．．．レアスキルとちゃうん？」

「それとはまた違ったものみたい。もつとこう、不自然というか、はやてたちのとは毛色が違うらしいんだ」

「．．．．．」

さつきから黙り込むことが多かったはやてがついには何も喋らなくなってしまうた。だがすぐに口を開く。

「わかった、ありがとう、フェイトちゃん」

「うん」

さつきまでの暗い雰囲気を払うようにはやてがパンツと手を合わせて別の話題に切り替える。

「よし、それじゃあなのはちゃんが帰ってくる前にちょっとイタズラの準備をアダア！」

ベシッ！つとシグナムがはやての頭を綺麗に叩いた。……………無言で。

（シグナムって、こんなノリよかったっけ）

そう疑問に思うフェイトだったが、人は変わっていくものだから、と自己完結をして目の前で繰り広げられている漫才を鑑賞することに決めた。

六時間目（後書き）

ごめんなさい。

言い分けはしません。

更新速度は遅くなると思いますがまた頑張っていきます。
感想やアドバイス、お願いします。

七時間目（前書き）

何度も言います。遅れてすみません。

七時間目

―夜の永遠亭、八意永琳の書斎

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

永遠亭に住む薬師、八意永琳は屋敷はおるか幻想郷にいる誰しもが寝静まっているだろう時間帯に、一人、思案に耽っていた。

永遠亭に住む、二匹（二人？）の兎のことである。

一匹は鈴仙・優曇華院・イナバ、月から脱走してきた月生まれのウサギで、現在は永琳の弟子、永遠亭の雑務を任されている。押し付けられているでもあながち間違いいではない。

もう一匹は因幡てゐ。迷いの竹林に住み着いていた地上の兎のリーダーで、ほぼ居候状態だ。

その二匹がどうしたのか、それは、数日前に遡らなければわからない。

「鈴仙、ちょっといいかしら」

「あ、はい、なんででしょうか、お師匠様」

玄関先で荷物の再確認をする少女、人里で薬売りをする準備をしていた優曇華に、永琳はついでを頼むように話し掛けた。

「あなた前言ってたわよね、迷いの竹林に何やら怪しい家屋があるって」

「ああ、はい。見回り、というかふらふら遊んでた兎から教えられてですね、てみると一回行ってみたんですよ。てゐはめんどくさそうでしたけど」

やや苦笑気味に鈴仙は答える。永琳もてゐの性格と鈴仙の気苦労を知っていたからかつられて苦笑してしまう。

鈴仙の気苦労の原因の一つが自分にもあると自覚していた永琳は、しかしそれは鈴仙が生真面目すぎてついやってしまうからと心の中で勝手に釈明をしつつ、鈴仙との会話に意識を戻す。

「それで、何かあったのかしら」

「特にはなかったです。一通り見て回ったんですけど、．．．．．所々床に穴が開いてたりとか使いそうにならない状態でした」

ものすごく湿って気持ち悪かったですー、と嫌なことを思い出したかのような話ぶりの鈴仙。

「そう、ありがとう、鈴仙」

「いえいえ、それじゃあ今日も行ってきます」

「いつてらっしゃい」

鈴仙が出掛けるのを見送った後、永琳は、新薬の研究を続けようと調査室に戻ろうと縁側を歩いていると、庭で兎たちと戯れているの姿を見掛けた。ちなみに兎たちは仕事を絶賛サボり中だ。後で鈴仙にやらせておこう、と溜め息をついてとりあえず見なかったことにした永琳だった。

(.....やっぱりどう考えてもおかしいわ)

何度も仮定を立てその考えを没にしてまた仮定を立てては証明できず没になっていく。

いや、証明できないのではない。この幻想郷ではあらゆる可能性を想定できる、どんなことが起きたとしても不思議じゃない、つまりは証明できる材料が多すぎて逆に手詰まりになってしまっているのだ。この幻想郷において常識は通用しない。それが痛いほど身にしみてわかる状況だった。

何が彼女をこんなにも考量させるのか、それは鈴仙の言った一言だった。

『兎から教えられてですね』

この一言が、永琳には引つ掛かってしょうがないのだ。
なぜなら……………、

「兎たちも元気そうだなにより」

「その元気を仕事にも費やして欲しいものだけど」

未申の刻（午後三時ぐらい）、永遠亭の姫様、蓬萊山輝夜と永琳
がお茶を飲んでいると、てゐをはじめとした兎たちがドタドタと屋
敷の中を走っていく音が二人に聞こえた。

「後でお仕置きね」

「そろそろ懲りて欲しいものだけど……………」

「姫様も少しは働いて欲しいものですね」

「あー、あー！きーこーえーなーいー！」

そんなことも日常茶飯事なもので、兎たちを止めることもなくた

だ、ボケーっとしてひたすらだらする二人。

「お茶請けが用意できましたー」

と、そこへお茶請けのいろいろを運んできた鈴仙が部屋に入ってきた。

しかしこの玉兔、万能だ、と永琳は毎度のこと感嘆する。鈴仙は家事なら大抵のことはこなしてしまう。それに加え菓子まで作ってしまうとは、恐るべし、と彼女は頭の中で思考する。

鈴仙がいろいろの乗った皿を永琳と輝夜それぞれの前にのせ、一息ついたそのとき、彼女はピクツとその身を震わせて固まってしまった。

「……………？　どうしたの鈴仙」

輝夜が心配そうに彼女の顔を覗き込む。

ハッとしたように鈴仙は我に帰り、心配かけまいと慌てて釈明をする。

「あ、いや、私自身にはなんにもないんですけど、ほら、ちょっと前に紫さんが来たときあったじゃないですか」

「来てたの？　永琳」

「ちょっと姫様は黙っててください」

永琳に軽くあしらわれて部屋の隅でいじける輝夜を脇目に鈴仙は続ける。

「月面戦争の後、気を付けなさいーって忠告してきたときです」

「ああ．．．．．、アレね」

月面戦争騒動の終結後、幻想郷の管理者、八雲紫は二度、永遠亭に訪れている。

一度目は月面戦争の実質の勝利宣言をしに来たとき。

二度目はついこの間、わざわざ自らの式も引き連れて警戒するよ
うに、と勧告をしに来たときだ。

『最近結界が悪意をもって干渉をされた形跡があつた。今の段階では何が起これとも断定できないが、警戒しておくに越したことはないので、お願いしたい』

「あの後独断ですけど、ちょっと永遠亭を中心にソナーみたいなのを張っていてですね」

「あら、私に内緒でそんなことやっていたんですか？」

「ひ、姫様やお師匠様のためを思ってたことですので．．．．．」

「ふーん．．．．．」

「．．．．．そ、それで今さっきちょっと反応があつたんでピクツとなっちゃっただけです」

永琳はそこまで聞き終えると目を伏せ考え込むそぶりを見せる。
永琳には一応輝夜の従者としての役目があり、それもあつてどう動くかをシミュレーションしているのだろうと鈴仙は思った。

永琳は整理がついたのかふと顔をあげて鈴仙に指示を出すため口

を開く。

「……………鈴仙」

「はいい！」

師匠の真顔を見て緩んでいた背筋をピンっと伸ばしてきれいな直立姿勢になる。

「今日これから用事はあるの？」

「えーっと、兎たちがサボった分の仕事を片付けようと思っていたのですが」

「そう、なら明日人里に薬を売りに行つたついでに見に行ってくれるかしら」

「え、今すぐにじゃないんですか？」

「もしかしたらあの焼き鳥屋かもしれないし、はたまたただの人間かもしれない。迷い込んだ人間だったら焼き鳥屋がなんとかするでしょうし、別のなにかでもあれも蓬莱人だから、気にすることはないでしょう」

「は、はあ」

「それより、まだ仕事が残っているのでしょうか、サボってないで働きなさい」

「ひどいっ…！」

納得のいつていない様子だった鈴仙を半ば強引に追い出した永琳。

着物姿でも構わず畳の上を寝転がっている輝夜を横目に、それでもその内心は穏やかではなかった。

なにか自分達の知らない表面化で、さながら賢者の海のように、水面下でなにかが起きているように感じられた。そういうときに決まって、何かが起こっているというものだと言っているのだ、と長年の経験から危機感を覚えていた……。

それが、二日前の回想だ。そう、二日前なのだ。

（鈴仙の言っていたこと、明らかな矛盾、そこになにか隠されているはず）

永琳はそう考えた。だが、確証を得られるものが、決定的な証拠が得られずにいる。そんな板挟みのような状況で焦ってもなにも得

られることはできない。

「結局、先送りか．．．．．」

その独り言は、迷いの竹林の静かで深い夜の中に溶けて消えていった。

「今日も収獲は無しか．．．．．」

一人、静かな幻想郷の夜の空に浮かぶ一人の少女。

広げていた両手を下ろすと、そのまま彼女は何処へと去っていったのだった。

七時間目（後書き）

ggd ggdですね。

ぶっちゃけちゃんと収集つくかどうか不安です。

まあ最後までやり通そうとは思いますがどうでしょうか。

あ、後、うどんげって、やっぱ地の文で優曇華の方がいいか鈴仙の方がいいかわからないんですけど、もしよかったら教えてください。

感想やアドバイス、お待ちしてます。

感想やアドバイス、お待ちしてます。

この番外編は重要なのか？（前書き）

結構本編に関わってくる番外編です。

読まなきゃわかんないというわけではないですが、一応です。

この番外編は重要なのか？

事故から大分経って、フェイトちゃんはやてちゃんと面会が許可され始めていて、私はホッとしていました。

そんな、ある日のこと……………。

今日はなぜか眠れなかった。

いつもなら寝ようと思ったたらすぐに寝付けたはずだったのに、今夜だけはギンギンに目が冴えてしまっている。

することもなく暇な時間帯ほど長く感じるものはない。

「……………なんか、いそうだなあ」

こんな寂しい夜の中に一人、微かな冷気の漂う部屋にいれば、誰だって不安になるだろう。

「よい子はもう寝る時間でしてよ」

突然、聞き慣れない声が聞こえた。

「っ!!」

慌ててその方向くと、そこにはとても綺麗な女の人何やら不気味な裂け目にのつてこちらに微笑んでいました。

紫と白を基調にしたドレス、変な形の帽子、傘——恐らくは日傘——を持ったその女性は、なんとというか、こちらを見透かしたような笑みをそのままに、ずいっとその身を乗り出してきた。

「誰か人を呼ぶような真似はしないでいいわよ」

やっぱり気づかれていた。

ひっそりとナースコールボタンに手を伸ばしていたわたしは仕方なく手を下ろしその女性と向き合うような形をとる。

「聞き分けがよろしくて結構」

不気味な微笑み……思い出した、胡散臭いだ。やっぱり胡散臭い笑みという表現がしっくりきた。その顔を、小さな子を褒めるときのようなそんな顔に変えて、また登場してきたときの格好に戻る。

……わたしだってもう小学四年生だ。幼稚園児と同じ扱いをするのはやめて欲しい。

「紹介が遅れましたわ」

といって、女性はどこからか扇子を取り出して口元にあてた。

「私、八雲紫ともうしますわ」

あれから紫さんからいくつか質問を受けた。

質問とはいっても、普段の生活とか周りの環境のこととか、友達の
のこととか、そんな特になんてこともないものだった。

でも途中で出されたなぞなぞ？ 謎かけ？ はわからなかった。

なんだっけ、朝は四本足、昼は二本足、夜は三本足のものはなあ
に？ だっけ。いくら考えてもダメでイライラしちゃった。

帰り際に紫さんはこう言った。

「この辺でわたしはお暇するけど、この事は誰にもいっちゃダメよ。
でない」と、

食べちゃうわよ

わかった？」

次の日にフェイトちゃんとシグナムさんがお見舞いに来たときにちよつと喋りそうになっちゃったけど、紫さんの言葉を思い出して変な雰囲気出しちゃった。

大丈夫だね、バレてないよね？

この番外編は重要なのか？（後書き）

やつつけみたいになりました。

すいませんでした。

感想やアドバイス、質問などありましたら是非是非、遠慮せずにく
ださい。

お願いします。

八時間目（前書き）

どうも、今回はちょっと時間軸を巻き戻してお送りします。
しかしながら、本編です。

いつにも増してグダグダですので、ご容赦ください。

八時間目

『私はアルハザード第6研究所新最高責任者、ハンス・グラードだ。とあるプロジェクトの責任者になった記念に、そのすべてを記していくとしよう。』

わざわざ紙媒体で書いているのは、まあ魔導書の猿真似だ。特に深い意味はない。

プロジェクトと一口に言ってもそんなに簡単なものじゃあない。

次世代の兵器、あらゆる状況に対し最良の選択をしどんな任務にもその魂を捧げることの出来る全く新しい生命を創ることだ。新たに生命を生み出すのは神を冒瀆する行為なのかもしれない。だがそれは気にしないでいいだろう。

人造人間の技術を確立させることができている私たちにとって神は越えるべき存在ではなくなった。我々は常に上を向いている。足元ばかりを見ているほどアルハザードの技術者は馬鹿ではないからな。

くそ、また失敗した！

身体の基本理論は構築完了しているのだ。地上にいるあらゆる生命体とも違い、食料を必要とせず、海中においても無呼吸状態で長時間の戦闘行為を行うことができ、なにより驚異的な生命力を持った新しい戦闘種族。例えば心臓を貫かれてもその蘇生力で死ぬことはない。百年単位で長い時間を生きその身を粉にするまで戦い続ける。しかしなにかが足りない。決定的な何かがわからない限りこの研究は終わりを迎えないだろう。

しかし最後の最後まで禁忌は犯したくないと、そう思っていた。

私はその足で多次元観測所に向かった。この研究は我々がどれだけ追究しても辿り着かないものなのだろう。そこで私は他世界に棲む生物を参考、モデルに採用しようと考えた。

しかしその世界というのが問題だ。何故ならば、いったい何処に我々が解析の済んでいない生物が生息するのだろうか。そこが問題なのだ。

.....やはり、あの『ゼロステージ』を蒸し返すしかない

のだろうか．．．．．。

アルハザードに住むものならば誰でも知っている歴史だ。

その昔、とある世界のとある惑星に私たちの先祖は生まれた。彼らは一人の天才のもとに集いその文明を、驚異的なスピードで発展させてきた。今のアルハザードには遠く及ばないが、当時は恐らく全次元トップレベルの文明だっただろう。しかしその繁栄も長くは続かなかった。

ある時当時の指導者が、その惑星の衛星に移住すると発表した。理由は地上の穢れから一刻も早く遠ざかりたいからとのことだった。衛星に移住するための技術は既に確立されていて、半月もかからずロケットは完成した。

しかしそれには定員があつた。その文明のおよそ半数しかフロンティアには辿り着けない。そこが、運命の分かれ道だったのだろう。とうとう出発の日がやって来たが、運が悪かったのか、地上に棲

むもうひとつの種族の襲撃を受け、文明は大混乱に陥った。先祖はロケットを守り抜くために命懸けで戦った。ロケットが往復してくるまでの辛抱だと。

しかし戦闘の最中ある通信が傍受された。

地上の部隊を見捨て、『11次元空間分解爆弾』の投下を決定したものだ。超ひもの段階からすべての物質を消し去る、現在でも最強の爆弾だ。

それを聞いた地上部隊のリーダーの決断は早かった。当時開発途中だった『次元跳躍艦』を起動、生存者をかき集め、爆弾の起動前にその世界を去ることができた……。

そうして辿り着いた場所こそがアルハザードだった。そこは未知なるエネルギーに満たされており、我々の先祖はそれを『魔力』と呼んだ。

もといた惑星の名は『地球』、衛生の名は『月』といった……。

そして、我々は億という年月を経て、再び、地球と月へと、足を運んだのであった。あのとき襲撃をしてきた種族、『妖怪』のサンブルを捕獲するために……。

運がよかったのだろう、月面では戦闘が行われていた。我々より数歩後ろの技術を持つ月人と妖怪の戦争。我々は先祖の報復のためといったところか小型の例の爆弾を戦場に落としてやった。

混乱に便乗して十数体のサンプルを確保した我々は早々にこの地を去った。この地に長く留まっても、なんの収穫にもならないからだ。しかし、あの賢者、『八意××』には会いたかったがな。

ついに我々は『妖怪』を製造することに成功した！ 長い年月がかかった……。この身を機械化させてまで長らえた甲斐があったというものだ……。！ コードネーム【無限の欲望】、ジェイル・スカリエッティだ！

緊急事態が発生した。どうやらアルハザードの動力部が暴走を始めてしまったらしい。恐らくはベルカの王達の過剰な力に反応してしまったのだろう。とにかく時間がない、この私たちの子供、ジェルだけでも逃がしてやりたい。この書と共に何処か別の世界へと転送しよう。そう、ミッドチルダだ、そこにしよう。座標の設定ミスがあるかもしれないが、あの子が生き残るためには仕方ない。．．．。

もうアルハザードもベルカも終わりだ。しかし、最後の最後で大きな成果をあげることができた．．．、それだけで、技術者としては満足なのだ。』

「紫様、何を読んでいらっしやるのですか？」

「ああ、これは、まあ色々漁ってたら見つけてね、懐かしいからつい読んじゃったのよ」

「はあ、そうですか．．．．．」

「ほんとに、色々あった時期だったから．．．．．」

この会話は、大きな騒動になる数日前のものだった。

グシャ！ミチッ！

地下室から響く何かを引きちぎるような音。

それに重なるように響く悲鳴。

暗くも最低限の照明を維持しているその廊下を、ナンバーズの長女、ウーノは白衣を片手に歩いていった。できる秘書のような印象を与えるその容姿は、驚くほど無表情で固まっていた。

絶えず響く悲鳴。

ウーノがとあるドアの前に立つ頃には、悲鳴は止んでいて、代わりに何かを食べているような音しか聞こえてこない。

「お食事中失礼します」

丁寧にドアをノックしたあと、ロックを解除しその中に入る。

入った途端鼻につく異臭。血肉の臭いが充満し、辺り一面に鮮血が飛び散っているその部屋。中央には、一人の男が一本の腕を加えていた。

「ああ、ウーノ、もうほとんど食べ終わってるよ」

そう言って男は腕を丸ごと一飲みにした。しかしウーノは慣れているといった具合に表情を変えない。

「なかなかの美味だったよ。力の回復もできた。」

「なによりです」

ウーノは白衣を男に手渡すと部屋をもう一度見渡した。

「どうかしたのかい」

「いえ、なにもありませんよ、ドクター」

その男、ジェイル・スカリエツティは深い笑みを顔に刻み部屋を後にした。ウーノもそれに続く。

「我が愛しき幻想郷はもうすぐだ……」

なのはの墜落事故があったのは、その数日後だった。

八時間目（後書き）

はい、グダグダでしたね。

まあ今回はいろんな種明かしがあったので、伏線とかも考えやすくなってるのではないでしょうか。

文章も、ここはこうした方がいいよ、とか、どんどんアドバイスください！

感想やアドバイス、質問や評価など、是非是非！よろしく願います！

九時間目（前書き）

遅くなつてすいません。

リアルの方で勉強や部活なので忙しくて投稿できませんでした。
投稿ペースはまた落ちます・・・・・・御容赦を。

九時間目

「あら、これは何かしら」

青々と深く生い茂っている森の中、幻想郷における神の石柱、鍵山雛はふと、不気味なものを見つけた。

日中彼女は幻想郷中の厄を集め溜め込むことをしており、今日もふらふらと厄集めに勤しんでいたのだった。

そんな彼女が見つけたもの、それは不気味な紋様だった。何処かで見かけたことがあるような、ないような、ともかく、それは一般的に儀式で用いられるような神聖なものでありながら不気味なオーラを放っていた。

雛はそれを詳しく調べるため、そろそろと用心深く近寄っていく。直後、彼女の身体がビクツと震え上がる。

（なに、この巨大で禍々しい厄は！ 何でこんなのがあったのに気がつかなかったの？！ これは不味いっ！とてつもなく！）

彼女の背中に冷や汗が止まらなくなる。

ガサツと、誰かが草を掻き分けている少し大きな音がして雛はまたしてもその肩を大きく震わせた。

「ん、お前は山の……」

奥から現れたのは、一人の少女だった。

物音の原因がわかったとたん、雛は警戒心を和らげる。

「な、なんだ、貴女でしたか、驚かせないでください」

心から安堵した、といった様子だ。

「それより、それは……………」

少女は真剣な顔つきで紋様に視線を送った。

雛は少ししてハツとしたように説明を始める。

「これですか、先程見つけたばかりでして、ちょっと調べようかと思っていたんですけど……………ものすごい厄です」

「そうらしいな……………この件については私に任されてくれな
いか？」

「天狗のアシスタントである貴女に？」

少女の一言に、心底驚いたかのような表情を雛は浮かべる。

「これはわたし絡みの件だ。山の方にも話は通してある」

声のトーンを下げて、少女は雛を見据えて話す。

「……………わかりましたわ、お願いさせてもらいます」
「有難う、助かる」

静けさが、その場を、森全体を支配する。
まるで、嵐の前触れのようなだった。

無限書庫は眠らないとは誰の言葉だっただろうか。

スクライアの子、ユーノ司書が膨大な、それこそ無限にあるような資料を整理する魔法を考案しなければ、無限書庫は単なる保管庫でしかその存在意義はなかったであろう。

しかし現在は、管理局において、もっとも有用であると認められた場所となった。それどころか、試験は必要であるが、一般市民でも司書として利用が可能になるなど、管理局だけにとどまらず、管理世界全土にその名を知らしめていた。

無論そんな場所だ、ミッド内の大学の教授から管理局の高官まで、幅広い分野の人間が集まってくる。

「．．．．これね」

「恐らくは間違いないかと思われます」

「漸くだわ、わざわざ面倒なステップを踏んだ甲斐があったわ」

「．．．．．そうですね」

「どうしたのそんないきなり遠い目しちゃって」

「申し訳ありません、ゆ．．．．．主はやて」

「フツ、まあでもわかるわ、気合いの入ったお芝居をしなければいけないって、私もうんざりしてたもの」

「ノリノリだった気もしますが」

「．．．．．それにしてもセンサーの精度が粗悪すぎて笑い事じゃなかったわね」

「仕様がありませんよ、そもそも魔法の定義の成り立ちがアレでしたから」

「それもそうね」

地上部隊の制服を着て怪しげな雰囲気をかもしながら会話しているのも通常通りなもので、その場にいる少ない人間も特段気にする様子はない。

「行きましようか、『烈火の将』」

「はい、『夜天の主』」

普段の彼女たちを知るものならばあり得ないといった感想をこぼすような会話をしていたとしても、誰も気に止めないのだ。

質素な部屋というのが、正直な感想だろう。

いや、質素とはいっても、普段彼が過ごしている場所を知っていればこそなのだが。

大きな立方体に近いその構造の中は、ごちゃごちゃと余分なコードやら書類やら機械やらが散乱しているわけでもなく、ましてや培養液の入ったガラスポッドが設置してあるわけでもない。

しかしながら、その世界における一般家庭にあるような家具もない。

あるのは転送装置と巨大な楕円上の鏡。トランスポートそして床に掘られた巨大な紋様。

その道を知る人ならば何かしらの儀式用の人であることが一目で分かるだろう。

その紋様は今でも淡く輝いている。術はまだ作動中なのだ。

無論鏡もただの鏡ではない。彼自身の力の結晶。術式と対応して場所を繋ぐ、所謂『門』だ。

そんな中、鏡の前に亡霊のようにたっている男が一人。

(・・・・・・・・フッ)

いや、微かに肩が震えている。不安や恐怖などの負の感情のせいではない。これは、武者震いだ。

(さあ、これでようやく本腰をいれることができる)

その目に写る鏡面を前に彼の拳は強く握りしめられる。鏡面に写っているのは彼の姿ではなく、下手すれば書物の中でしか見られないような風景だ。文明の利器などほとんど存在しない、人の住むありのままの原風景。俗にいう人里の全景だ。

(何度か訪れてはいたが、今回はやはり違うな・・・・・・・・これが私の夢の・・・・・・・・第一步だ)

彼は今までの道のりを反芻するように目を閉じる。大きく深呼吸をして、高ぶる心を抑えようとする。

(さあ、今行くよ、・・・・・・・・幻想郷よ!)

数瞬の後、彼は意を決して鏡へと一步、二歩と進んでいく。一步一步、今までの苦労を労うかのごとく、ゆっくりと、着実に。

彼、ジェイル・スカリエツィは幻想郷へと足を踏みいれ――

「あら、そんなに鏡に近づきすぎると鼻がぶつかってしまっわよ」

ることはなかった。

ジェイルは弾かれたように後ろに振り向くと、二人の女性が彼を見つめていた。一人はいつ何が起こつても対応できるよう臨戦態勢で、一人は何やら亀裂に座つてこちらに向かつて深い笑みを向けてきている。ただ、その目は相手を射抜くような目。

明らかに浮いたような色合いのドレスを着こなし、亀裂に座り静かに怒る女性が口を開く。

「初めましてと言うべきかしら、ジェイル・スカリエツィさん？」

「……………管理局……………ではなさそうだな。なぜ私の名を？」

「それに関しては色々ありまして、そんなことよりも、あなたは一体何をしようとしていたの？ わざわざ大結界を弄つてまで幻想郷に何の用なのかしら？」

幻想郷、という言葉を目にしたとたん、彼の表情に驚愕の色が浮かび上がる。

「その関係者なのかね？」

「……………ああ、申し遅れましたわ、私、幻想郷の管理者を勤めております、八雲紫ともうしますわ。こっちは式の藍」

もう一人の、導師服を着た女性は同意の意を示すように構えを強くする。

「……………ハハッ！ ハハハハハハハハハハハッ！」

突然、ジェイルは狂ったように笑い出した。まるでこれ以上無い

ほど面白いものを見つけたかのように。

紫と藍は動かない。むしろジェイルの次の行動を警戒してか臨戦態勢へと移行する。

しかし、ジェイルは叫びのような笑いを抑えようとしない。むしろもつと気分を高揚させようとしているようにもとれる。

「君が、あの、『妖怪の賢者』！ 八雲紫か！ハハハッ！ 脳内ライブラリにも記録はあったが、まさか御目にかかることができようとは！ ハハハッ！」

「それはどうも」

しかし、ピタツとジェイルは狂笑を止める。

「新たな居住者に対する歓迎にでも来てくれたのかな」

微塵もそうは思っていない様子でジェイルは問う。

それに対し紫も胡散臭い答えで返す。

「あらあら、他人の庭を無断で弄った招かれざるお客人のことなんて誰が歓迎したくなるのでしょうか」

「まあいいだろうな」

紫はクスクスと、ジェイルは若干ニヒルな笑みをお互いに浮かべ合う。

そんなやり取りの中藍は少しずつジェイルとの距離を詰めていく。

「しかし、なぜ君はそうまで必死にわたしを止めたがる。わたしはただ決壊を弄って繋げたただけだろうに……この場所と幻想郷を」

「弄っただけならまだ迎え入れてからでも遅くはなかった。だけど

ね、あなたは住人にまで手を出してしまっただけ」

紫はその瞳の中にたぎらせていた怒りを強くした。スウツと眼が細まり少しずつその膨大な妖力の片鱗を見せていく。

ジェイルも涼しそうな顔をしているがその実、身の危険を感じているのだらう、若干右足を後ろに引き目の前の圧力に押されているよう格好になる。

「あなたが今回使った術式は二つ。大結界を構成している術式に意図的に介入するものが一つと、二つ目がこれ」

紫は床を指差した。

「あなたの能力を利用した複雑かつ強力な妖術。あなたの能力は何かは知らないけど、わたしがここに来た時点で逃げ出さないということは、よほど自信があるのか、それともそれほどまで力がないのか、……………まあ後者はあり得ないわね」

ジェイルは動かない。

「それにしても大変だったわあ……………わざわざ境界弄って人間に取り憑く？ことをしなきゃならなかったんですもの……………要らない手間まで消費することになってしまっただけ……………だからこの件はさっさと終わらせてしまいたい」

ゆつくりと、宣戦布告は告げられる。

「おとなしくお縄につきなさい、ジェイル・スカリエッティ」

それと同時に、藍はジェイルへと飛び掛かっていく。

藍の拳がジェイルの顔面を捉えようとしても、彼は動かない。

そして一瞬、世界がぶれた。

視界が正常に戻ったそのとき藍が見たものは、ジェイルの何を考えているかわからない笑みではなく、自身の主人、八雲紫の顔だった。

「！！」

慌てて攻撃を中断し、あわやというところで当たらずには済んだのだが、紫と藍、二人はどちらも何が起こったかわからないといった様子。

「君の推論は正しいよ、八雲紫。御褒美に種明かしといこうじゃないか」

まるで河原で拾った綺麗な石を自慢する子供のような笑顔を見せながらジェイルは話し始める。

「私の能力は『いれかえる程度の能力』。そしてその効力が届く条件はわたしに触れているかわたしが生み出した陣の及ぶ範囲内に存在していること。これは無機物でも有機物でも問題はない。

そして、陣と陣を結びつけることができれば、相互に作用させることもできる。

さて、私がどうやって幻想郷に侵入することができたかが、ポイントなんだ……。フツ、すまない、科学者として自らの成果を他人に自慢できるときほど嬉しいものはなくてね…………。

博麗大結界は素晴らしい結界だ。強固で、複雑で、付け入る隙などほとんど見当たらない。私が数十年かけて導きだした術でさえほんの僅かな穴しか開けられなかったのだ。だが、」

そこで彼は一旦話を切り、懷から一つのビー玉のような球体を取り出した。そしてそれを両者の間へ放り投げる。

地面に接触したと同時に、そこを中心とした 複雑な紋様が浮かび上がる。それは床に刻まれているものと同様のものだった。

「その僅かな穴からこれを投げ入れ、適当な場所に設置しておく。何者かがこれに嵌まってくれば、無事術式は作動し、結界に開いた穴も安定し、自由に行き来できるようになる。」

まあ、その術式自体並大抵のものではないがね」

しかしそこでジェイルは肩をすくめた。

「しかし、欠点はあった。陣同士の結び付きも、次元の壁は越えられなかったのだ．．．．。そのせいでわざわざ評議会の連中の世話になる羽目になったし、結果、このように最後の最後で見つかつてしまった」

「．．．．それはそれは残念でしたね」

「だがわたしは諦めない」

そしてまた、視界がぶれた。

気がつくや二人の前からジェイルは綺麗さっぱり姿を消していた。

「しまった．．．．っ！藍、向こうにいたら即刻永遠亭に向かってもらっわ、月人たちにこの事を！橙には彼女を呼びにいつてもらいます！」

「紫様は！」

「わたしはあいつの後を追っわ！」

紫はスキマを開き、その中に二人とも入っていった。

かつてないほどの、焦りを見せて。

「八意様！」

「貴女は八雲の式だったかしら？ どうしたの、そんなに慌てて
「実は……………」」

「……………わかりました。すぐに向かいます」

「お師匠様ー、どうかなさったんですかー」

「貴女はすっこんでなさい、鈴仙」

「ひどっ！」

「とうわけです!」

「．．．．．わかった、すぐ行く」

「絶対ですよ!それじゃあ急いでるんで!」

「．．．．．八雲の式の式か．．．．．元気だな．．．．．、
私の意志を継いでくれたあいつも、元気でやっているだろうか」

終演は近い。

九時間目（後書き）

感想やアドバイス、御指摘などどうぞよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1222u/>

なのはのパーフェクト砲撃教室

2011年11月28日01時56分発行